

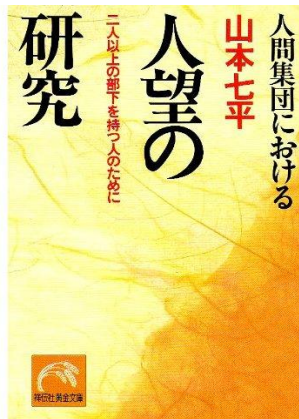
人望の研究

～2人以上の部下を持つ人のために～

山本七平 著

【目次】

- ①はじめに
- ②著者紹介
- ③「人望」という絶対的基準
- ④思想の流入と「人望」
- ⑤「徳」とは何か？
- ⑥「徳」+能力＝「人望」
- ⑦まとめ
- ⑧おわりに
- ⑨参考文献



①はじめに

皆さん、人望のある人というのはどのような人だと思いますか？友達が多い人？性格がいい人？信頼できる人？分かっているようで実はよく分からない言葉、人望。本書は朱子の「近思録」や「中庸」などを引用しながら、人望の全容を炙り出し、その習得への道を探っていきます。

②著者紹介

山本七平(1921-1991)…戦後活躍した碩学。主に日本人とはなにかについて研究を重ねる。著書として、日本人独自の伝統的発想及び秩序とされる「空気」について考察した「空気の研究」や、日本社会の構造を炙り出した「日本はなぜ変わらないのか」などがある。

③「人望」という絶対的基準

現代の日本社会において、たとえどれほど能力があっても、周りから「あいつは人望がないからダメだ」という評価を受ければその人の前途は断たれる。それほど人望とは絶対的な規範となっているのである。その背景としては、現代の日本が著しく平等主義であることが挙げられると著者は指摘する。というのも、昔であれば他に様々な評価基準があった(血統・身分など)。しかし、そうした社会的判断基準が消失していくと、自ずと個人の内面的な部分、つまり人望しか判断できるものがなくなってしまうのである。

それほど重要なものなのにもかかわらず、人望は何か、どうやって得られるのか誰も教えてくれないという由々しき事態が発生しているのである。

④思想の流入と人望

京都大学の矢野暢教授が「掘り起こし 共鳴現象」という文化現象を指摘している。例えば日本のような文化的蓄積が豊富な国へ、外国からある思想やイデオロギーが流入する。その場合、その思想やイデオロギーをそのまま受け入れるということではなく、「既にもともと日本にあった、似たような思想・イデオロギー」と共鳴し、また列のものに変容させるのである。

例えばそれは、明治期に流入してきた西政民主主義にも当てはまる。現在の日本の民主主義と西政のそれが違うのはそういう理由であり、「既に日本に存在した、似たような思想」と共鳴したのである。こうした共鳴現象を経て生まれたのが大正的民主主義である。

大正時代から昭和時代にかけて活躍した人々はみな「四書五経」を叩きこまれて育った。幼少期に叩きこまれたものはその人間の思想に大きく影響するのは言うまでもないだろう。内村鑑三が「四書五経」のうちの1つである「孟子」を英訳したのだが、それは「孟子」の中に日本的平等主義・民主主義の共鳴を見出したからである。

例えば平等主義に関して言えば、許行の完全平等主義などが挙げられる。(文公、まことに賢君です。しかし、まだ真の道を知っていない。賢者は人民と並んで耕して食し、自分で飯を炊きながら政治をするものです。現在の滕国に穀物倉庫と財物庫があるのは、民を収奪し、苦しめて自分を養っていることです。どうして賢君といえましょうか?) 言わば収奪は一切許されず、君主も自ら田を耕し食を得るべきだと言うのである。

この思想は後の中国に大きな影響を与え、人民公社や文化大革命などに繋がっていった。それは日本も同様で、この思想に強い影響を受けたことが推測される。麻生太郎元首相が贅沢をすると猛バッシングを浴び、土光敏夫元経団連会長のようにメザシを食べていると人望が集まるのである。こうした背景によって、日本は強力な平等主義が根付いたと言えるだろう。

また、中国の神話では、古代には徳の高いものが順々に帝位を譲ったとされている。これを禪譲という。

孟子の弟子、万章はこの神話を取り上げ、政権授受の正当性をどこに求めるか、孟子に質問した。これに対し孟子は「天がそれを受けるとは、民がそれを受けるところだ」言わば人民の意向が天の決定を表すと考えていたのである。要するに、人望があつて民に受け入れられた者が政権を継承するのが正当であるという考え方になる。この結果、王になるかどうかは人望によって決定され、いわば「王になりたい」と思わなくても「王にさせられて」しまう、というわけである。こうした考えも当然日本に影響を与えていると考えられる。新総理大臣が就任の際に「今回、因らずも大命を拝し…」などと言うのもそうした背景からであると考えられる。

⑤「徳」とは何か？

ここから「人望」を得るにはどうすればよいのか述べていく。著者は、人望を獲得することにおいて「徳」はとても重要な要素であるとしている。ここでは徳川時代の必読書であった「近思録」を引用しながら、「徳」とは何か見ていこうと思う。

戦後は中国の文革時代のように、伝統的なものは悪として徹底的に排除された。それは近思録も同じ事であった。しかし、近思録が排除されようが日本の根本的な価値観(いわば人望主義)は消えることはないため、引き続き人望は強く要請されたわけである。にもかかわらずそれを習得するために何を学べばいいのか分からない。そして人望のない人間は社会から排除されてしまうのであった。伝統文化の復讐である。

さて、ここから「徳」を得るためにどうすればよいのか見ていく。

まず、人間はみな聖人ではないので、ごく自然にしていればそれが全て「徳」につながるということはない。従って、「自己制御」が徳に繋がる道なのである。自己抑制ができていない例として、近思録に出てくる「克伐怨欲」を紹介する。「克」とは他人を押しつけて自分が出ていくのを好むということである。「伐」は自己主張ばかりで「この組織は俺のお陰で成り立っているのだ」という態度である。「怨」はうらむことだが、誰かが自分の「克」を妨害しようとしているとうらむ。最後の「欲」は私欲・貪欲である。このようなことをしては人望を得ることはできない。

では、どうするのか？その原則が「克己復礼」すなわち「己に克ちて礼に復る」である。正しい生活規範と社会ルールに戻り、それを通して自己の意志を行って初めて、社会に働きかけることができる。

だが、たとえ「克伐怨欲」を抑えても、人間には「情」がある。この「情」とは、感情とか欲情に近い言葉で、これには喜・怒・哀・懼・愛・悪・欲の「七情」がある。「近思録」によれば徳は学ぶことによって習得可能であるとしているが、そこできちんと「七情」を抑制して中庸を保つことを心がけ、自らの心をただし、その本性を養い全うしなければならない。しかし愚者は七情を抑制することを知らず、これにまかせて行動する。もちろんこうした人間は「徳」のない人間なので「人望のない」人間となってしまう。

さて、遂にこうした状態から脱した者は次にどうすればよいか。「近思録」にはこう書いてある。「然らば学の道は必ず先ず諸を心に明らかにし、往く所を知り、然して後、力行して以て至らんことを求む。所謂『明なるによりて誠なるなり』これを誠にするの道は、道を信ずること篤きに在り。道を信ずること篤ければ、則ち之を行ふこと果、之を行ふこと果なれば、則ち守ること固し」。

これを要約すると、「そこで『徳』という超能力への学びの道は、まず以上のことを明確に自覚し、その目的地を知って、その次に努力してそこに至ろうと努めることである。これが『中庸』のいう『明なるによりて誠なるなり』ということである。そして『誠』になる方法は、篤く道を信ずることである。道を信ずること篤ければ、果断にそれを行うことができ、果断に行えば、固くそれを守って実践していくことができる」となる。つまり、「信ずる」ことが、それを行い、かつ継続していける道だとしていることである。

ひとまずここまで述べてみたものの非常に分かりにくいと思うので、「近思録」が具体的に挙げている9つの要素(九徳)を以下に記す。

- 1…寛かんにして栗りつ(寛大だが(まりがある))
- 2…柔じゆうにして互りつ(柔和だが事が処理できる)
- 3…急げんにして恭きやう(まじめだが、丁寧でつけんどんでない)
- 4…乱らんにして敬けい(事を治める能力があるが、慎み深い)
- 5…擾じゆうにして毅き(おとなしいが、内が強い)
- 6…直ちくにして温ぬん(正直・率直だが、温和)
- 7…简かんにして廉れん(大まかだが、(っかりしている))
- 8…剛かうにして塞さい(剛健だが、内も充実)
- 9…疆きやうにして義ぎ(剛勇だが、義(い))

こうした重要なことは大抵、言葉にしてみると平凡である。お気づきのこととは思うが、これらは互いに相反する概念なので、どれか一方が欠けたり逆の意味になると不徳となる。片方全てがそうなれば「九不徳」であり、全てそうなってしまつたら「十八不徳」となる。十八不徳などというのは人徳どころではなく人間失格の域なので、せいぜい九不徳である。こうした人物に人徳はないのである。

これまでのことを総合すると、「十八不徳」で「七情を激発」、「克伐怨欲」な人物と言うのは本当にどうしようもなく、手の打ちようがない。

さて、先ほど述べた、「九徳」、これは矛盾しているからできないと思われるかもしれない。確かにその通りなのであるが、「近思録」によれば、無欲になり心を静め、九徳を意識しながら訓練を重ねることで習得は可能だとしている。

先に述べたように、こうした矛盾は人間そのものにあり、それを克服するのは当然のことであるといった考え方は、健全な社会であればどこにもある。しかしその克服の方法は文化によって違う。そこで、夏目漱石「草枕」の有名な冒頭の一文を思い返してみよう。

「智に働けば角が立つ、情に棹せば流される、意地を通せば窮屈だ、兎角人の世は住みにくい」

これは私たちにとってみれば納得のいくものであると思う。しかし当然のごとく、西政人であれば理解に苦しむだろう。この後に「知者は之(中庸)に過ぎ、愚者は之に及ばず」という文章を見るとますますはつきりする。これは「知者も愚者もどちらも中庸ではありえない。世間で言う知者とは出過ぎ者のことで、やらなくてもいいことをやり、考えなくてもいいことを考える。愚者はこれに反して全て足りない」と言う意味で、要するに日本においては「中庸を欠いた人間は感覚的に嫌だ」という価値観が存在するということである。

ちなみに中庸というのは妥協の産物などではなく、イメージ的には「偏頗なき動かざる中心を持つ」といった感じである。中庸を得た人間は高次の常識人であり、それはつまり人徳があり、人望がある者の意となる。「中庸こそ人望の不可欠の条件」なのである。

また、中庸を得るには「言葉を発する場合に、その言葉が平素の行いに不一致ではないかと反省する。また、自分の行いが平素の言葉と矛盾していないかと反省する」ことを継続的に行っていかなければならないとしている。

※小まとめ※「情既に熾んにして益ます蕩し、其の性鑿す。是の故に覚者は其の情を約して中(中庸)に合わせ使め、其の心を正し、其の性を養う。愚者は則ち之を制するを知らず、其の情を縦にして邪僻に至り、其の性を枯して之を亡ぼす」

⑥「徳」+能力=「人望」

以上、これまでどのように「徳」を習得すればよいのか述べてきた。しかしこれだけでは「人望」の獲得へは不十分である。

我が雄弁部を例にとって考えてみる。もし先輩が上記のような徳を備えていたとしても、知識はなく、ロジックもろくに組めず、話す能力も乏しかったらその人に人望は集まるだろうか？ 答えはやはり否である。人望を得るためには徳に加えて集団を率いるだけの能力が必要なのである。

集団において何か行動を起こす時、リーダーは通常3つの手順を踏む。

- 1、状況判断
- 2、決心
- 3、処置

である。これらのことは机上でも可能だが、実際に行動に移すとすると部下掌握が不可欠となり、その基となる人望がなければ組織は上手く機能しない。一方で、これら3つが的確に行えなければ人望は失墜する。この2つは表裏一体なのである。

リーダーがその集団を率いる際、上記のような態度(克伐怨欲や七情激発など)を取ったら最期であるが、最も戒めるべきは、遲疑逡巡し決断ができず、部下を戸惑わせてしまうことである。 そうなるとリーダーは体面を保つため、ますますリーダーらしく振舞おうとする。それをすると「十八不徳」が出現し、その集団は失敗する。この決断と言うのは非常に難しく、「疑を以って疑を決すれば、決必ず当たらず」(荀子)であり、一方で「断に当たって断ぜざれば、反って其の乱を受く」のである。

従って決断はあらゆる面から状況を検討し、自己の判断に誤りがないと信じたその瞬間に行うのが適切である。と同時に、その決断やプロセスはなるべく部下に伝えるべきである。

ところで、小林秀雄が指摘するように、中庸を常識と把握すれば少し分かりやすくなる。状況判断において常識を積み重ねることで致命的なミス回避を回避することができる。例えば、「鋼鉄の生産力がアメリカの10分の1で、石油もなく、長く続いた日華事変で消耗して食料の配給さえ十分でない日本が、世界最強の軍事国であるアメリカと闘って勝てるはずがない」であるとか、「日本軍の規模で広大な中国大陸を支配できるはずがない」などである。従って、心の平静を保ち、常識を積み重ねることで結論を見出し、行動に移すことがリーダーに求められるのである。

⑦まとめ

人望を獲得する為にはどのようにすればよいのか。

子どもは純真である反面、「克伐怨欲」に基づく「七情」を激発させるという点で「禽獣に近し」(「^{ほうしょくだんい}飽食暖衣、^{いっきよ}逸居して^{きょう}教なければ則ち禽獣に近し」)。

そこでそのつまらない「^{プライド}矜」を捨て去り、「七情」を「中庸」に則して制御して「九徳」を獲得するよう修練し、最終的には「^{きょう}絜矩の道」を目指す。同時に「中庸」に則しての自己抑制によって能力を獲得する。

これが以上述べてきた人望獲得への簡単な道のりである。

何度も言うように、言葉にすると簡単である。しかし実践するには継続的な努力と精神力が必要なことは言うまでもないだろう。

※絜矩の道…「上の人について好まれないと考える行いは、自分もその行いで下の人を使わず、下の人について好まれないと考える行いは、自分もその行いで上の人に事えず、前の人について好まれないと考える行いは、その行いで後の人を導くことをせず、後の人について好まれないと考える行いは、その行いで前の人に従うことをせず、右の人について好まれないと考える行いは、その行いを左の人に及ぼさず、左の人について好まれないと考える行いは、その行いを右の人に及ぼさない。このようにすることを絜矩の道というのである」

⑧おわりに

日本を代表する評論家、小林秀雄はこんな言葉を残しています。

「生活経験の質、その濃淡、深淺、純不純を、私たちは、お互いに感じ取っているものだ。あえて言えば、その真偽、正不正まで、暗黙のうちに評価し合っているものだ」

自分のことは意外とよく見抜かれていて、潜在的に、感覚的に評価されているのです。今現在先輩である2年生は、胸を張って「私は先輩だ」と言えますか？また来年先輩になる1年生は、後輩の憧れとされるような人望ある人間になれるか？基調文にも載っている「人間の陶冶」とはまさに「徳を育むこと」であり、「人望ある人間になること」なのだと思えます。この読書会がその一助になれば幸いです。

⑨参考文献

山本七平「人間集団における人望の研究 二人以上の部下を持つ人のために」祥伝社黄金文庫 平成25年7月10日 第13刷発行